

# 新歴史の見える風景

金ヶ崎城跡

敦賀市金ヶ崎町1

新田軍の悲劇と織田信長の決断を物語る城



月見御殿（頂上）近くの古戦場跡碑▶

金ヶ崎城は、敦賀湾に突き出た岬に築かれた山城で、古くから海上・陸上交通の要衝として重視されてきた。現在は金ヶ崎公園として整備され、麓には金崎宮が鎮座している。その起源は源平合戦の時代に遡り、木曾義仲の南進に対抗するため平氏が築いたとされるが、詳細は定かではない。

この城は、南北朝時代には南朝・北朝両軍による激しい攻防戦が繰り広げられ、戦国時代には織田信長の越前侵攻の舞台ともなった。

建武4年（1337）、足利尊氏に追われた新田義貞は、尊良・恒良両親王を奉じて一族とともに金ヶ崎城に籠城した。しかし、越前守護・足利尾張守（斯波）高経率いる幕府軍の大軍に包囲され、兵糧も尽きて落城に追い込まれた。義貞は弟・脇屋義助とともに杣山城へ脱出し反撃を試みたが、翌年、灯明寺繩手における斯波軍との遭遇戦で討死した。そ



の後も南軍は義助を総大将として抵抗を続けたが、北軍の攻勢の前に各地の拠点は次々と落城し、義助は美濃へ敗走、越前は北軍の支配下に入った。

時代は下って戦国時代。元龜元年（1570）、將軍足利義昭を奉じていた織田信長は、上洛命令を無視する越前の朝倉義景を討伐するため、大軍を率いて越前侵攻を開始した。朝倉氏も信長との対決は避けられぬと見て、敦賀の金ヶ崎・天筒山城に加え、木ノ芽峠や栃ノ木峠一带に防備態勢を敷いていた。

4月20日、信長は徳川家康らとの連合軍約3万を率いて京を発ち、若狭を経て敦賀へ進軍した。25日、織田軍は敦賀の東に位置し、金ヶ崎と尾根続きの天筒山城への攻撃を開始した。朝倉氏は金ヶ崎城と連携して防戦したが、織田軍の圧倒的な兵力の前に一日で陥

落した。

天筒山城の陥落により、金ヶ崎城は高所から見下ろされる不利な状況に陥った。翌26日、織田軍が金ヶ崎城への攻撃を開始すると、城主朝倉景恒は戦意を喪失し降伏、城を明け渡した。

これにより信長は敦賀の要衝を掌握し、一乗谷への進軍を計画するが、予期せぬ事態が発生する。同盟関係にあったはずの近江の浅井長政が突如離反し、信長の背後を突くべく出陣の報がもたらされた。信長の本隊はまだ敦賀にあったが、先発隊はすでに木ノ芽峠を越えており、朝倉・浅井両軍に南北から挟撃されれば、全軍壊滅は避けられない危機に陥った。

この絶体絶命の窮地に、信長は即座に撤退を決断。この退却戦は、後に「金ヶ崎の退き口」と呼ばれ、信長の生涯における最大の危機とされる。

現在も、城跡には山の地形を巧みに利用した曲輪や堀切などの遺構が数多く残る。それらは、南北朝時代の悲劇と、信長が窮地に陥った緊迫した歴史を今に伝えている。（文 奥山秀範）



▲二ノ木戸跡



▲一ノ木戸跡付近の堀切

▲海岸の絹掛崎から主郭（本丸）伝承地の月見御殿をみる、要害ぶりがよくわかる